

The background of the cover is a photograph of a mountain landscape. The sky is a clear, vibrant blue with a few wispy white clouds. The mountain slopes are covered in lush green vegetation, with a dirt path winding through the terrain. Several small figures of people can be seen on the path, providing a sense of scale. The overall scene is bright and scenic.

IOP
NEWSLETTER
No. 1

公益財団法人
東洋哲学研究所

目次

「IOP NEWSLETTER」No.1では、公益財団法人・東洋哲学研究所が、2014年に推進してきた「研究・調査」「国際学術交流」「研究成果公開」の各事業に関するニュースやトピックを紹介します。

●シンポジウム

学術大会	2
マレーシア「イスラームと仏教の対話」	3
●法華経展	4
●連続公開講演会	5
●学術交流	8
●法華経写本シリーズ & イスラーム・レクチャー	9
●出版物	10

公益財団法人 東洋哲学研究所

〒192-0003 東京都八王子市丹木町 1-236

Tel: 042 (691) 6591 Fax: 042 (691) 6588

メールアドレス: iop_info@iop.or.jp

日本語サイト: <http://www.totetu.org/>

英語サイト: <http://www.iop.or.jp/>

2014年 学術大会

第29回学術大会

シンポジウム「人類の未来と仏教の可能性」



研究員の1年間の研究成果を発表する場として、年1回、全研究員が当研究所に集い、学術大会を開催している。大会では、「地球文明」「環境」「生命倫理」など毎回テーマを設定。国内外の著名な学識者を招聘し、テーマに基づいた講演を中心としたシンポジウムも開催している。

第29回となる学術大会は、3月22、23日の両日、「人類の未来と仏教の可能性」をテーマに開催した（22日、創価大学／23日、東洋哲学研究所）。

22日には、同テーマでのシンポジウムが開かれ、オックスフォード仏教学研究のリチャード・ゴンブリッチ博士による基調講演「人類の未来に対する仏教の可能性」が行われた。

博士は「仏教が平和のために何をできるか」という課題に論及し、誰もが積極的に慈愛の行動をするというのは高貴な理想ではあるが、むしろ「互いを殺したり憎んだりするのを止める」「互いの過ちを正そうという偏執を捨て、その代わりに、個々人が自分自身の心と行いを浄化することに集中できるよう、仏教が人々を説得する」というのが実際的な目標であろうと述べた。さらに博士は、それができるならば、仏教

には、人類の存続に寄与する可能性があると考えたと語った。

またシンポジウムでは、同研究所研究員のスレン・ラーガヴァン博士が「仏教の（脱）民族化—グローバル化した世界秩序のために」と題して特別講演を行った。

講演で博士は、「仏教が代替的な世界観となり、国家や民族の境界を超えた喫緊の地球規模の問題に対処する実際的なモデルとなるために、仏教徒の間で脱民族的アイデンティティが築かれることが必要である」と論じた。

このほか、東洋哲学研究所の大西克明研究員による「多文化主義・ポスト世俗主義と仏教的世界観」、松岡幹夫研究員による「仏教は絶対平和主義か」の発表ならびに質疑応答が行われた。

「イスラームと仏教の対話」会議

「平和と共生—イスラームと仏教の対話」会議は4月15日、東洋哲学研究所、マレーシア創価学会(SGM)、マラヤ大学文明間対話センター(UMCCD)、マレーシア首相府国家統一・統合局などの協力のもと、クアラルンプールのマレーシア総合文化センターで行われた。

基調講演では、ジョセフ・クルップ首相府大臣が、多様宗教国家であるマレーシアでの宗教間対話の必要性を訴え、「あらゆる宗教の信徒の間で相互理解と尊敬が示されることが不可欠だ」と述べた。その際、宗教間対話は、コミュニティ全体を強くすることを目的とすべきであり、偏狭な自己利益のために行われてはならないと付け加えた。

また、たとえ今日の対話が小さな一歩にしか見えなくとも、「どんな作用にも必ず反作用がある」との



物理(宇宙)の法則が保証しているように、この小さな一歩は、いつか実を結ぶだろうと語った。

マラヤ大学文明間対話センター研究員のモハメド・イスマ・ラムジ博士は「平和を構築するには、まず自らの中に確立することから始めなければならない」と訴えた。同センター所長のファリダ・ノール博士は、平和を建設するためには個人と社会のレベルで築かれなければならないと述べた。

東洋哲学研究所の海外研究員で、マラヤ大学医学部教授のクリストファー・ボイ・チョイメン博士は「誠実な対話は、真の友情への第一歩である」と述べた。



ジョセフ・クルップ大臣



左からラムジ博士、司会のファリダ・ノール博士、ボイ博士。

法華経—平和と共生のメッセージ展

「法華経—平和と共生のメッセージ」展は、法華経の歴史と理念を紹介する展示として企画・制作。ロシア科学アカデミー東洋古文書研究所、中国・敦煌研究院、インド文化国際アカデミーの全面協力により、貴重な写本資料や仏教芸術を、複製やパネルで紹介。世界 12 カ国・地域で 40 万人が観賞している。



マレーシア クアラルンプール展

イスラーム文化圏初の開催となったマレーシア総合文化センターでの法華経展(2月15日～5月18日)には、ジョセフ・クルップ首相府大臣がメッセージを寄せるとともに、インド文化国際アカデミーのロケッシュ・チャンドラ博士が出席。会期中、7万1千人が観賞に訪れた。



北海道 札幌展

東京、神戸、福岡に続く北海道池田講堂の札幌展(10月5日～11月3日)では、マハトマ・ガンジーのアシュラム(道場)で唱えられていた祈りの言葉をまとめた冊子を初公開。中国の滕安軍札幌総領事、ロシアのアンドレイ・ファブリーチニコフ札幌総領事をはじめ、5万7千人が観賞した。



アルゼンチン ブエノスアイレス展

南米・アルゼンチンで初となる法華経展(9月25日～10月6日)は、東洋学研究機関であるサルバドル大学との共催。開幕式では、創立者・池田SGI会長の「東洋哲学の研究の推進」等を讃えて、「顕彰状」が贈られた。



アルゼンチン サン・ミゲル・デ・トゥクマン展

アルゼンチン2都市目となる法華経展(11月22日～29日)は、国立トゥクマン大学で開かれた。閉幕式では、創立者の「世界平和への貢献」を讃えて「荣誉賞」が贈られた。また、サルバドル大学のルア学部長による「法華経の世界的流布」についての記念講演も行われた。

連続公開 講演会

学問の成果を広く紹介するために、入場無料で統一テーマによる連続公開講演会を、毎年秋に開催。哲学・思想から平和・環境・人権・生命倫理問題など各専門分野の第一級の研究者を講師として招いている。

2014年は、「地球文明への道」を統一テーマとして掲げた。「地球環境問題」「政治・社会・経済の問題群」「人間の精神性の危機」等の諸問題に対して、「大自然との共生」「人類の平和共存」、そして「人間の精神の変革」を打ち立てゆく方途を見出しながら、全人類的な「地球文明」創出への展望を探ることを目的として行われた。

地球文明への道

第1回「『地球文明』の肖像——比較文明学の旅路から」



◆講師：吉澤 五郎氏（麗澤大学比較文明文化研究センター客員教授）

◆開催日：9月16日

◆会場：日本青年館（東京・新宿区）

吉澤氏は、比較文明学、西欧中世文化史を専門としつつ、英国の歴史学者であるアーノルド・トインビー研究の第一人者として、「トインビー・地球市民の会」代表等を歴任している。

講演では、長年に渡って、トインビーの歴史観・文明観の研究と紹介に尽力してきたことが語られた。

そして、連続公開講演会の統一テーマである「地球文明」について、インドの詩聖タゴールの“文明の使命とは、人びとの間に結合をもたらし、平和と調和を築くことである”との言葉を引用しつつ、人類史の未来を開くために、大変に重要で、深い意義を持つテーマであると述べた。

第2回「生命を基本にする社会」



- ◆講師：中村 桂子氏（JT 生命誌研究館館長）
- ◆開催日：9月30日
- ◆会場：梅田スカイビル（大阪・北区）

中村氏は、人間も含めての様々な生き物たちの「生きている」様子を見つめ、そこから「どう生きるか」を探る新しい知を「生命誌」として長年に渡って研究を続け、2002年にJT生命誌研究館館長に就任している。

講演では、東洋哲学研究所が掲げる「地球文明の創出」に言及。科学者として東日本大震災を見つめてきた心情に触れ、自然の脅威を改めて知るとともに、自然と共生し、地球全体で物事を考えていく時代を構築していかなければなりませんと述べた。そして「地球上には、人間だけでなく、無数の生き物が暮らしています。そうして生命と一緒に生きていく文明を創ることが、地球文明を生むことになると思います。今回のテーマに掲げた『生命を基本にする社会』とは、生命がより良く、『生きる力』を育むことにあるのです」と訴えた。

第3回「ファクター5 地球の持続可能性に向けて—



少ない資源で豊かな社会を」

- ◆講師：シェリル・デーシャ氏（クイーンズランド工科大学理工学部上級講師）
- ◆開催日：10月2日
- ◆会場：日本青年館（東京・新宿区）

デーシャ氏は、ローマクラブ共同会長で環境学者のエルンスト・U・フォン・ヴァイツゼッカー博士とともに、『ファクター5 エネルギー効率の5倍向上を目指すイノベーションと経済方策』を著した環境科学者である。

講演で氏は「ファクター5の目的は、全体的なシステム改革をすることによって、人々に希望を抱かせることです。私たちは、テクノロジー、インフラストラクチャー、法的基準、教育、文化的慣習などが全体的システムとして相互に作用をすることで、『健全な環境を保全しながら経済発展が可能である』ことを実例をもって示そうとしているのです」と語った。

第4回「宇宙から考える文明」



- ◆講師：松井 孝典氏（千葉工業大学惑星探査研究センター所長）
- ◆開催日：10月16日
- ◆会場：日本青年館（東京・新宿区）

松井氏は、地球惑星物理学を専攻し、アストロバイオロジー（宇宙生物学）研究の第一人者である。これまで、NASA 客員研究員、東京大学大学院教授などを歴任し、2009年より千葉工業大学惑星探査研究センター所長を務めている。

講演では、現代における様々な課題を前に、それらを地球のレベルだけでなく、宇宙規模で包括的に見ていく時、普遍的な視点が構築されていくと強調。宇宙・地球・生命が誕生していく過程は、均一から分化へと進んだ変化によるものであり、人類は、その歩みの中で、「人間圏」を生み出したのであると述べた。

さらに、「人間が共同体を創り、より良い生き方を志向していくのが文明であり、混沌とした現代世界にあって、その役割を果たす一つが、宗教なのです」と語った。

第5回「地球文明と生命価値経済システム」



- ◆講師：八巻 節夫氏（東洋大学名誉教授）
- ◆開催日：11月11日
- ◆会場：日本青年館（東京・新宿区）

八巻氏は、財政学・環境経済学を専門として、地球環境問題に対する経済学からのアプローチを行ってきた。東洋大学経済学部教授、日本財政学会理事などを歴任し、現在、東洋大学名誉教授、東洋哲学研究所委嘱研究員を務める。

講演会では、「地球文明への道」の最終回としての位置付けを明確にし、人類がいかに生命価値を増進させる文明を築くことができるのかを主題として論じた。現代の物質文明が抱える諸問題に言及しつつ、「成長の限界」を迎えている今、地球規模での意識革命と地球全体を包む生命尊厳の価値体系を構築する必要があると強調。教育者・牧口常三郎が提唱した人道的競争の重要性に注目し、物質的豊かさから生命多様性や豊かさを競い合う社会の実現へ、全世界が進んで行かなくてはならないと訴えた。

学術交流



マレーシア イスラーム理解研究所
ニック・ムスタファ事務総長が講演

- ◆テーマ：経済成長への文明論的アプローチ:イスラームの視座
- ◆開催日：6月3日
- ◆会場：ヴィラフォンテーヌ東京汐留（東京・港区）

イスラーム理解研究所は、1992年にマハティール首相(当時)によって創立。ムスタファ事務総長は、マレーシア国際イスラーム大学院経済・経営学部長、オックスフォード・イスラーム研究センター客員研究員等を歴任する。講演では「人間は、経済の追求ではなく、精神性を大切にする必要があります。この精神性は、イスラームだけでなく仏教にもあるのです」と強調した。

マレーシア マラヤ大学

モハメド・ファウジ・ヤコブ特任教授が講演

- ◆テーマ：多元主義の包括～マレーシア政府のイニシアチブについて～
- ◆開催日：7月1日
- ◆会場：東洋哲学研究所



ファウジ教授は、ハーバード大学やロンドン・スクール・オブ・ビジネスの研究員、マラヤ大学で人文社会科学部学部長等を歴任する。講演では、クルアーンに用いられる『ワサティヤ』（穏健・中道）の概念に触れ、「マレーシアは今、『ワサティヤ』を力強く続ける時なのです」と述べた。



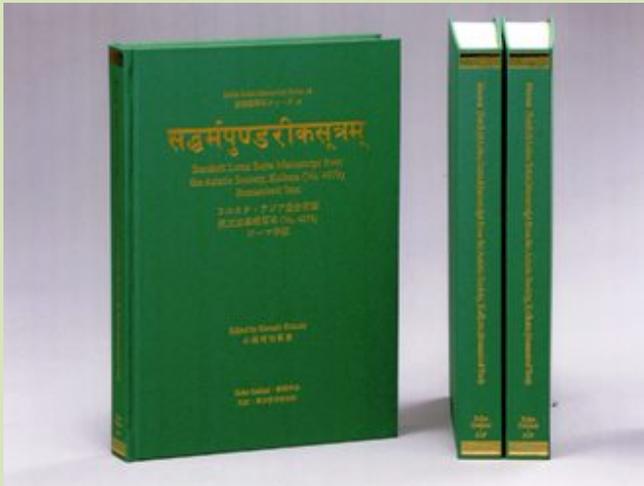
インド ガンディー主義ビジョン・バリュー・センター
ショーバナ・ラダクリシュナ会長が講演

- ◆テーマ：「倫理的リーダーシップと変革」
- ◆開催日：10月7日
- ◆会場：東洋哲学研究所

ラダクリシュナ会長は、ガンディー主義哲学等を専門として、貧困地域の発展の為の活動を続けている。会長は「非暴力という平和と調和を実現する為の手段は、現代世界にあって、ますます必要になってくるのです」と訴えた。

創価学会「法華経写本シリーズ」

創価学会と東洋哲学研究所は、「法華経」を中心とした初期大乘仏教の研究に貢献するため、1997年以來、法華経写本を所蔵する世界の研究機関等の協力を得て、「法華経写本シリーズ」の刊行を推進してきた。これまで中国・旅順博物館が所蔵する法華経写本の写真版及びローマ字版をはじめ、極めて貴重な“ペトロフスキー本”“ギルギット本”の写真版など、16点を上梓している。



『コルカタ・アジア協会所蔵 梵文法華経写本 (No. 4079) —ローマ字版』(非売品) 写本の書写年には、ネパール暦 800 年 (西暦 1680 年) という記述が見られ、現在披見できる紙写本の中では最も古いもの。ネパール系貝葉写本の書写時期 (西暦 11 世紀頃から 12 世紀頃) から 400 年後に始まる紙写本の書写時期の始まりを告げるもので、その後の紙写本書写の流れの源流となった貴重な資料である。

イスラーム レクチャー

Islamic Lectures

東洋哲学研究所の活動の柱である文明間・宗教間対話の一環として、4月～7月に「イスラーム・レクチャー」を実施した。イスラーム研究者4人を招き、当研究所の研究員・委嘱研究員を対象として、それぞれの論考の発表とディスカッションを行った。発表内容は「東洋学術研究」第173号に収録している。それぞれのテーマ・発表者は、次の通り。

■ 「イスラーム哲学における『個人』の問題」

小林 剛(明治学院大学 講師)

■ 「プロティノスからバルザフの入り口へ」

堀江 聡(国際基督教大学 講師)

■ 「イスラームと仏教」

鎌田 繁(東京大学東洋文化研究所 教授)

■ 「現代スンナ派イスラームにおける『正統』を巡る解釈

—シリアとサウジアラビアの宗教言説を事例に—

高尾 賢一郎(上智大学アジア文化研究所 共同研究員)

Publications

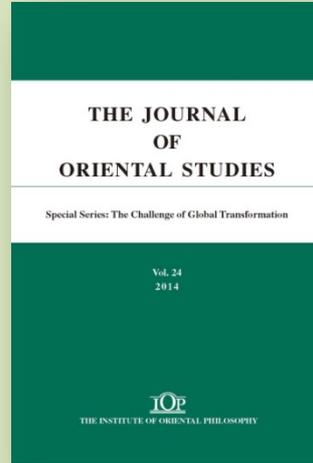
出版物

研究の成果を広く社会に還元し、貢献するため、機関誌「東洋学術研究」をはじめ、さまざまな出版活動を行っている。



『東洋学術研究』
(年2回刊、本体1,238円)

仏教思想、平和、女性、生命倫理、宗教間対話など幅広いテーマの論考を掲載。第172号では「教育」、第173号では「イスラームとの対話」を特集している。



『THE JOURNAL OF ORIENTAL STUDIES』
(年1回刊、本体2,000円)

「東洋学術研究」の英語版として刊行。Vol.24には、日本語版・第172号に収録された内容を中心に紹介している。



『東洋哲学研究所紀要』
(年1回刊、非売品)

紀要は、東洋哲学研究所の研究員による研究成果等をまとめたもの。第30号には、海外研究員・委嘱研究員による13編の論考等を収録する。



『ガイドブック 法華経展——平和と共生のメッセージ——』
(本体905円)

法華経展、の内容をオールカラーで紹介。最新の研究成果等を反映した第2版を刊行した。



『持続可能な地球文明への道』
(本体1,000円)

仏教の人間主義を展開し、「人類的課題」の克服を目指すシリーズ「大乘仏教の挑戦」第9弾。

これまでの主な単行本

- 『人間主義の旗を——寛容・慈悲・対話』(2007年刊)
 - 『人権の世紀へのメッセージ——“第三の千年”に何が必要か』(2009年刊)
 - 『平和の架け橋——人間教育を語る』(2012年刊)
- ほか、「大乘仏教の挑戦シリーズ」など多数。



公益財団法人 東洋哲学研究所

THE INSTITUTE OF ORIENTAL PHILOSOPHY